

編集後記

少しスリムな『言語文化』第三九号をお届けする。今号の特集は、昨年度末の三月十四日に開催されたオンライン・シンポジウム「メディアと子供——児童文学のトランスカルチュラルな展開」の報告及び登壇者による原稿と寄稿である。オンラインにも拘わらず大盛況であったと聞く。遠隔という平常と異なる形態で（コロナ禍において普及し、見慣れてきたとも言えるが）、登壇者も聴衆もそれぞれがそれぞれの場所から個別に画面上に参加して実施されたシンポジウム。今回は文字のみで追体感して頂きたい。企画・実施された英文学科の貞廣真紀先生、ならびに登壇者、そして今号にご寄稿頂いた皆さまには心から御礼申し上げます。

コロナ禍で世界は三年目の春を迎えよ

うとしている。この「編集後記」を書きながら、誰がここまで長引くと想像できただろうと自問してみる。思い返してみると、新型コロナウイルス感染症拡大が始まった当初から、専門家達は過去の事例を持ち出して、ウィルス終息まで最低でも二三年はかかるだろうと言ってはいたが、科学技術も情報も発達した現代社会においてそんなことはあり得ないであろうと高を括っていた。この傲慢な思い込みはしばらくして、百年前、いや何百年も前から変わらぬマスクと手洗い、ソールシャルディスタンスにワクチンしか対処方法がないと知ったときに幻想だったと気付かされたのだが。ワクチンでさえ、新たな変異株が出てくる度に接種を繰り返さねばならない。新型コロナウイルスは二〇二二年三月現在、第六波にあり、収束どころか未だ先が見えない状態にある。それにしてもここまで長引くとは！そしてこの一ヶ月、ロシアのウクライナ侵略によって穏やかな日常が簡単に崩壊していく様を毎日ネットやテレビで見

ている。わたしたちは、そして世界は一体どこに向かっているのだろうか？この一年はさらに全世界に関わる行事が、それも二回も開催された。一年越しで開催された二〇二〇東京夏季オリンピック、そして現在開催中の北京冬季オリンピックである。ビッグニュースに事欠かないアクティヴな一年であったにも拘わらず、実感がないのはやはり他者と距離を置かずにはいられない新型コロナウイルスの影響であろうか。この異常事態の下で世に出る本冊子を将来手にし、思いを馳せてくれる誰かの生きる時代が、今よりずっと平和で穏やかであることを心から願う。

ただ大学は、そして社会全体もこの一年間は悲観的な事ばかりではなかったことも書いておかねばならない。大学では昨年度の何もわからずに遠隔授業をしながらはイケなかった状況と違い、今年度は教員も学生も環境に順応して余裕も出てきた。ようやく全面的に対面授業に戻ることが期待された春学期は、直に第四

波の到来で再びオンライン授業に戻ってしまい、夏には第五波の襲来もあったが、その間、教員の遠隔授業のスキルは確実に上がったと思う。秋学期からはZoom、コロナではほぼ対面授業に戻って、キャンパスにはようやく学生の笑い声に戻ってきた。授業内で行う学生同士のディスカッションもオンラインではTeamsやZoomの機能を使いこなしてグループディスカッションに目覚め、対面に戻るとマスクとソーシャルディスタンスを厳守して実施。その結果、我がクラスの学生たちのディスカッション能力は、皮肉なことに例年よりも上となった。一人で家からパジャマを着たまま真っ黒な画面に向かうより、感染リスクの恐怖はあっても仲間と一緒に対面で授業を受ける方がずっと良い、先生の顔を見て受ける授業の方が内容がわかり易い、と多くの学生は言う。教員にしても学生の反応を直に感じられる対面授業の方が良いと感じているに違いない。だがコロナが終息して対面授業が全面復活してもオンライン授

業は何らかの形で残るであろう。レポート回収やアンケートなどは圧倒的にオンライン授業システムを利用するほうが間違いないし、時間の節約にもなるからである。教育方法に新しい選択肢を与えてくれたのも皮肉なことにコロナであった。

編集後記では言語文化研究所の一年間を振り返るのだが、まずイベントに関しては一件も開催されなかった。二〇二〇年度から新型コロナウイルス感染拡大により延期となっているイベントは全てフランスやアメリカなど、海外からゲストをお呼びして開催される講演会やシンポジウムばかりであり、現段階では開催は全て未定である。読書会に関しては「ホメロス研究会」「スワヒリ語講座」そして四月から始まった「戯曲を読む会」はオンラインで開催され、対面を前提とする「古典ギリシャ語初歩文法」は残念ながら昨年度に引き続き休講であった。イベント、読書会、ともに詳細及び来年度の活動については言語文化研究所のホ

ームページを参照されたい。

このような状況下、何とか三回のオンライン委員会議を開催し、この『言語文化』第三九号を刊行できたのは、委員の先生方と主事の斉藤綾子先生、そしてなんといつても言語文化研究所事務担当の伊東絢さんの手厚いサポートのお陰である。心から感謝申し上げます。

二〇二二年三月末に本学文学部フランス文学科を退任されるジャック・レヴィ先生が教授会で挨拶された際、一日も早く明治学院らしいイベントが活発に開催される日が戻ってくることを願っていると仰っていた。レヴィ先生はこの言語文化研究所の所長も務められ、フランスと日本の架け橋として多くの国際シンポジウムや講演会に登壇され、また開催された。先生のご意志をしっかりと引き継いで、明治学院らしいイベントを開催していきたいものである。

(穴澤万里子)

*

特集「メディアと子供——児童文学のトランスカルチュラルな展開」は、言語文化研究所主催で二〇二一年三月

十四日に開催されたシンポジウムを基に構成されている。このシンポジウムは、二〇一八年三月に第一回が開催された「トランスレーション、アダプテーション、インターテクスチュアリティ」シンポジウムの三回目にあたる。児童文学作品そのものの魅力に加え、翻訳研究やアダプテーション作品に対する関心の高まりもあつて、当日は百名近くの方々にご参加いただいた。対面でのイベントの場合、会場が東京ということもあり首都圏からの参加が多くなる傾向があるが、オンライン開催により、全国の研究者の方々、児童文学に関心を持つ多くの方々にご参加いただくことができた。ご登壇の先生方やご参加の皆様に変更して感謝申しあげたい。今回の紀要特集では、シンポジウムの口頭発表の内容に加え、修正を施した論文に加え、日本女子大学の川端有子氏にご寄稿いただいた。

特集に新たな視点を提供していただいたことに心よりお礼申し上げます。

本特集には九本の論文が掲載されているが、巻頭は基調講演をしていただいた山本史郎氏の論考である。一般に「翻訳」は「異なる言語への移し替え」を、「アダプテーション」は「言語を超えた異なる媒体への移し替え」を指すと考えられているが、山本氏はローマン・ヤコブソンを引きながら、別種のものと考えられてきたこれらの活動が実は同じ種類の翻訳活動であることを指摘し、アダプテーションの理論化に一石を投じる。その際、とりわけ山本氏が着目するのはジョークやナンセンスといった言葉遊びである。それらの言語文化的なとらえ方は、語間翻訳において変容され、媒体間翻訳（映像アダプテーション）においては、人物の風貌や言葉遣い、さらに別の人物に台詞が振り分けられるなど「外化」されることになる。山本氏は「ホビット」、『チョコレート工場』の秘密』や『不思議

の国のアリス』の中からそれぞれ特定のシーンを取りあげ、日英言語間翻訳および媒体間翻訳の比較を行う。そして、こうした翻訳活動が、作品全体の性質をジョークからファンタジーへ、あるいはナンセンスからセンスへと転換していく過程を詳細に論じる。

山本氏の理論的提言に続けて、本特集では、小説の翻訳・翻案、挿絵、アニメーション、実写映画など、様々な翻訳活動が論じられる。実写映画化されたアダプテーション作品を中心に扱うのは小林英美氏と川端有子氏である。『ピーターラビット』論で小林氏は、原作の世界観を破壊する挑戦的行為と見做されてきた実写映画の中に、むしろ伝統の内在于より正確には「革新の中の伝統」——を見出している。本論考では実写映画以前の翻訳、複数の翻案作品が参照されており、アダプテーションを「プロセス」として捉える点特徴的だが（後述の目下氏の論考でもこのアプローチが取られている）、小林氏は、実写に先行する複数

のアダプテーション作品が原文に内在する語り手の存在を顕在化させてきたこと、また、それが現実世界と絵本世界をつなぐ役割を果たしていたことを指摘する。原作から翻案作品へと受け継がれた語りの性質は実写映画にも継承され、さらに「心の声」というワーズワスを彷彿とさせる要素も加えられる。そもそも原作者ポターの反抗心がうさぎの野生に託され、原作の底流に「秩序と破壊」双方の要素があったとすれば、実写映画もまた、原作に内在したものを顕在化させ、原作に新たな生命を吹き込むものとして捉えることができるだろう。

川端氏はC・S・ルイス原作の映画『ライオンと魔女』を取り上げ、原作を改変し強調点をずらしていく映画制作会社や監督・脚本の狙いと、作品が必然的に呼び込んでしまう歴史的コンテキストの両面から本作を論じる。フェアリー・テイルの展開の原作の物語は、実写映画において危機と戦う子供の冒険スペクタクルへと転換されるのだが、映画では現代の

観客にも理解できるようにという配慮から第二次世界大戦の空襲が描かれ、現実の戦争と魔女との戦いが二重写しにされている。そのとき、原作の宗教性が弱められる代わりに、戦争に立ち向かう「家族の絆」（とりわけ兄弟の葛藤や男性同士の間帯）が強調されることになる。兄弟関係や家族の絆という時代を超越したテーマは現代の読者の共感を誘うことも貢献したであろうが、川端氏はここで映画制作時の歴史的コンテキストを参照する。「戦いのおかげで家族（兄弟）が互いの絆を取り戻す」という映画の物語展開が、国家と家族の再強化というポスト九・一一的コンテキストに接続されるといふ論文の結部には大いに納得させられる。

アニメーション翻案を中心に扱うのは清水友理氏と安藤聡氏である。清水氏は「世界名作劇場シリーズ」を外国児童文学のテレビアニメーション翻案の「規格」と捉え、その性質を再定位する作品として『若草物語——ナンとジョー先生』

を取り上げる。本作品は前作『愛の若草物語』の（半ば）継続作品として前作の登場人物を配置すると同時に、大人になったナンによる回想形式を設けているのだが、こうした設定が子供の視聴者のみならず、「かつて子供だった今は大人の」視聴者の共感を呼び起こす装置となっていることを清水氏は指摘する。さらに、過去のシリーズ作品へのオマージュを自己参照的に取り入れ、同一声優を用することによって、本作は「世界名作劇場」というシリーズ全体を反復し、ノスタルジーを喚起しながらシリーズの規格を訴求的に確立するのだ。清水氏の議論は、世代の異なる人物のみならず、時代を超えて作品をつなぐ「世界名作劇場」という規格そのもの、ひいては日本における外国児童文学の受容そのものの規格を紐解くことに貢献している。

安藤氏は『思い出のマーニー』が、原作の舞台であるノーフォーク州の入江の湿地から北海道東部の湿地に移し替えられたことに着目する。安藤氏によれ

ば、カズオ・イシグロが「イングランドの失われた片隅」と呼んだノーフォークの荒涼とした風景は、主人公に「内省と孤独の実感の機会」を与え、少女時代の祖母との時を超えた邂逅と自身の過去との和解を可能にする重要な原作の構成要素である。イースト・アングリアの風物を北海道のそれに巧みに置き換えた映画は、場所や時代の設定の違いにも関わらず、見事なまでに原作の雰囲気を再生させた優れたアダブテーションの一例であると安藤氏は結論している。

映像媒体にはさまざまなものがあるが、媒体の性質がアダブテーションの内容に影響することもあるはずだ。笹田裕子氏はこの点に注意を払い、ロアルド・ダールの原作がいかにストップモーションアニメーション作品『ファンタスティック Mr. Fox』に昇華されたかを論じる。本作品には原作が書かれた場所、監督自身が愛読した初版の挿絵が取り込まれているのだが、ストップモーションアニメーション特有の「ぎこちなさ」が一見洗

練されたミスターフォックスの「生きづらさ」を反映しているかもしれないという指摘は大変興味深い。また、原作者が予定しつつも最終的に書くことができなかった設定を映画が採用していることは、「未来からの贈り物」としてのアダブテーションの位置付けを再認識させてくれる。

先に紹介したように、安藤氏の論考では日本とイギリスという二つの舞台のバランスの関係を論じられているが、本シンポジウムの大きなテーマ軸の一つに「トランスナショナル」「トランスカルチュラル」な翻案の射程がある。本紀要特集で特にその点に焦点しているのが、劉娟氏、J A 日下氏、本多まりえ氏の論考である。劉氏は中国の教育現場における翻訳児童文学の活用を論じる。中国では二〇〇〇年代になって「翻訳絵本」が急成長を遂げた。それは教材として教育現場で活用されるのみならず、絵本教授法研究書や絵本教材開発にも多大な影響を与えている。劉氏はその発展と

経緯、その要因を紐解いていく。もともと中国の幼稚園や小学校ではオリジナル絵本「図画書」を「国語教材」として活用する絵本教育が行われてきたが、近年、翻訳絵本の重要性が高まった要因に教育改革がある。劉氏によれば、教科書の単元体系が「知識単元」から人文性を重んじる「主題単元」に変更され、「人と母語文化の関係」について考えさせる「素質教育」が強調されるのに応答して翻訳絵本の教育的価値がいつそう高まったのである。劉氏の議論は中国における児童文学の受容について多くの知見を与えてくれるものであると同時に、絵本の教育的活用についての日中間の相違について新たな考察を切り開くものでもあるだろう。

日下氏は東アフリカのマサイの民話を再話したアメリカの児童文学、ヴァーナ・アーデマの *Who's in Rabbit's House* を論じる。日下氏はリンダ・ハッチオンが問題提起したアダブテーションがなされる際の「プロセス」の重要性に触れ、本作の

複数的、複合的な形成過程に注意を促す。日下氏によれば、アーデマは二〇世紀初頭に植民地事業の一環として収集・編纂されたマサイの民話をまず短編小説に再話し、その後、セルフ・アダプテーションを行うのだが、その際、民族衣装の忠実な再現に気を配るのみならず、仮面劇という民衆芸術形式を活用し、オノマトペの多用や、いわゆる「異時同図法」を使った挿絵の追加によってマサイの民話の語りの共同体験としてのあり方を再現する。日下氏は、民話という生きた口承伝統のテクスト化や、翻訳がはらむ文化篡奪の危険性、テクストの脱歴史・脱政治化、アフリカ文化の一元化など、ポストコロニアリズムの様々な問題点に注意を喚起しつつ、児童文学としてマサイの文化を広く知らしめ、マサイの民話に新たな生命を吹き込んだアーデマの翻案の意義を論じている。

本多氏の論考で扱われるのは、明治時代の女性雑誌『女学世界』に掲載された『コルデリア姫』である。本多氏によ

れば、明治時代、シェイクスピアの劇は英語教育の一環として女子教育に取り入れられていたが、宮田修によって翻訳・翻案された劇は英語修練以上に精神修養の目的があった。同時代の他の翻訳において、コルデリアの孝心や涙を見せる姿が強調される傾向にあるのに対して、宮田による翻案はコルデリア姫の言葉使い、反骨精神の強い性格づけに特徴があり、こうした特徴は当時の雑誌の読み手であった女学生たちの抵抗文化——髪型や服装、「てよだわ言葉」の使用によって封建主義的社会に抵抗する独自の女学生文化——を反映するものであった。本多氏は、宮田の女子教育論である『良妻賢母論』の分析を通じて、女性の教育や自立を強調した宮田が、その教育理念に基づく女性の理想像としてコルデリアを造形し、女学生文化を後押しした可能性を指摘している。

原作から時代的にも、地域的にも、世界的にも隔たった場所で作られたアダプテーション作品(あるいはその過程)

を扱った本特集の論考はいずれも、原作、原案が一体どのようなものだったのか、その語りの手法はどのようなものだったのかを改めて考えさせてくれる。笹田氏の論考をはじめ、本特集の中でも何度か言及されているが、アダプテーションという(大橋洋一の言葉を使えば)「未来からの贈り物」によって、作品は未来という起源に差し向けられるのだらう。また、本特集の複数の論文を関連的に読むことで、アダプテーションと翻訳の関係、教育における活用、国家事業と翻訳など、重要な問題系が浮き彫りになるだらう。本特集が児童文学研究あるいはアダプテーション研究のさらなる展開に開かれていくことを願ってやまない。

なお、表紙にはウォルター・クレイソンによる『美女と野獣』(Beauty and the Beast, 1875)の挿絵を使用した。

(貞廣真紀)